

売上げ1150億円!

「ツムラ」が国民を欺いた!!

講習会で異論の医師を恫喝!!

特集

漢方の大嘘!!

第2弾

自然と健康を科学する
漢方のツムラ

ツムラHPより



売上げ1150億円、医療用漢方薬のシェア8割を誇る製薬会社「ツムラ」はいかにして日本の漢方業界を「牛耳って」いったのか。異論を恫喝で封じる「講習会」、名ばかりの漢方専門医、次々と大学に設置された寄付講座……。ツムラが国民を欺いた「漢方」の大嘘第2弾。

「効く」から使われているわけではないツムラの漢方薬

い難い。では漢方の知識を医者に教える役割を果たしたのは誰なのかといえば、それはツムラでした。日本全国で漢方の勉強会を開き、日本東洋医学会の組織強化にも尽力した。それは確かに企業の目的は収益を上げること。医者に対する漢方教育も、収益を上げるために宣伝活動に他ならないのです。

すなわち、本来、大学で教えるべき医学教育を、利益を追求すべき企業が代わって行つたわけである。ツムラとしては、効率よく漢方を教え、多くの医者に使つてもらわなければ売上上がりえないでの、全国各地で医者を集め、講習会を開催した。漢方の研究を始めたばかりの頃、その講習会に顔を出した日笠氏は驚くべき体験をすることになる。

「漢方業界でメシを食えなくしてやる」——ツムラの社員からそう恫喝されたというのだが、そのシーンを詳しく紹介する前に、まずはツムラが「漢方教育」を

い難い。では漢方の知識を医者に行つたことによる「弊害」について触れておきたい。それは、「方証相対」という、漢方の一部の流派が唱えていた考え方方が全国に広められてしまつたことです。日本

漢方では、患者の症状を「証」と言い、それと処方がセットになつていていう意味から「方証相対」といいます。残念ながら、この稚拙な考え方こそが本当の漢方だと信じている医者が今でもたくさんいます

後に紹介する「恫喝シン」——とも関係するこの「方証相対」について、「葛根湯」を例にして日笠氏に説明してもらおう。

「漢方の研究を始めた当初、私は葛根湯がなぜ効くのか分からませんでした。本を読んでみると、葛根湯は風邪だけではなく、肩こりに効くことがあります。でも、汗が出ていても汗が出て熱を感じている時はどうすればいいのですか?」寒気ではなく、熱を感じている時はどうすればいいのですか?」

それに対して副院長は、「そんな時は大まかに『証』を捉えて、汗が出ていても汗が出て熱を感じている

と答えたが、日笠氏としては到底納得できなかつた。

また、講習会の講師が大

分からなかつたのです」

葛根湯の処方が初めて記載されたのは、今から1800年も前に書かれた中国の古典医学書「傷寒論」。

（背中や肩が机の板のよう

に硬くなり、汗が出なくて風に当たると寒気がする時

は、太陽病だから葛根湯で治療しなさい）

と、書かれている。

「当時は病気が体の表面から内部に入つていく状態によつて病気を区別していま

したが、『太陽病』とは、病

気がまだ体の表面にある状

態を指す言葉として理解し

て下さい。確かに風邪をひいたら背中がぞくぞくして汗が出ない状態」というの

はある。しかし、西洋医学

では風邪薬を肩こりには使

いませんし、さらに「傷寒

論」には乳汁分泌に効くと

は書いていません

ところが、「方証相対」の考え方には従えば、

「傷寒論」の葛根湯の欄

に書かれている症状が出て

いれば、風邪などの感染症

だけではなく、リウマチで

葛根湯を構成する生薬1つ

1つに薬理作用があるため、

様々な症状に効果を發揮するのですが、当時はそれが

は、薬を売らんがための方

法です。1976年以降、

148処方の漢方薬が保険適用になりましたが、その

頃、大学で漢方を教えるところはありませんでした。大学で教えるよりも先に漢方薬が保険適用されてしまつたのです。例えるなら、自動車教習所がどこにもないのに、突然、車が売り出された状態。これが、不幸と言えます

そう語るのは、香杏舍銀座クリニック院長で漢方医の日笠穰氏(66)だ。漢方の大家、山本巖医師に師事して三十数年前から研究を始め、現在は主に自費診療で漢方治療を施している日笠氏。以下、日笠氏自身の体験にも触れながら、ツムラが日本の漢方を歪めていた「構図」と「手法」を明らかにしていきたい。

「保険適用になつた当時、漢方の講義は一切行われておらず、今日でも積極的な講義が行われているとは言

う。あろうが草麻疹であろうが葛根湯が効くということになるのです。症状さえ出ていれば、原因が分からなく、いはれば、この薬、という考え方でもこの薬、という考え方には明らかにおかしい」

かような疑問を抱いていた頃、日笠氏はツムラが開催している講習会に参加する機会があつた。講師を務めていたのは大病院の副院長で、講演のテーマはまさか「方証相対」。質問を受け付ける段になり、日笠氏はこう訊いた。

「専門家の先生に来てもらつて、病気を区別していま

すが、『太陽病』とは、病

気がまだ体の表面にある状

態を指す言葉として理解し

て下さい。確かに風邪をひいたら背中がぞくぞくして汗が出ない状態」というの

はある。しかし、西洋医学

では風邪薬を肩こりには使

いませんし、さらに「傷寒

論」には乳汁分泌に効くと

は書いていません

ところが、「方証相対」の考え方には従えば、

「傷寒論」の葛根湯の欄

に書かれている症状が出て

いれば、風邪などの感染症

だけではなく、リウマチで

葛根湯を構成する生薬1つ

1つに薬理作用があるため、

様々な症状に効果を發揮するのですが、当時はそれが

は、薬を売らんがための方

法です。1976年以降、

148処方の漢方薬が保険適用になりましたが、その

頃、大学で漢方を教えるところはありませんでした。大学で教えるよりも先に漢方薬が保険適用されてしまつたのです。例えるなら、自動車教習所がどこにもないのに、突然、車が売り出された状態。これが、不幸と言えます

そう語るのは、香杏舍銀座クリニック院長で漢方医の日笠穰氏(66)だ。漢方の大家、山本巖医師に師事して三十数年前から研究を始め、現在は主に自費診療で漢方治療を施している日笠氏。以下、日笠氏自身の体験にも触れながら、ツムラが日本の漢方を歪めていた「構図」と「手法」を明らかにしていきたい。

「保険適用になつた当時、漢方の講義は一切行われておらず、今日でも積極的な講義が行われているとは言

う。あろうが草麻疹であろうが葛根湯が効くということになるのです。症状さえ出ていれば、原因が分からなく、いはれば、この薬、という考え方でもこの薬、という考え方には明らかにおかしい」

かのような疑問を抱いていた頃、日笠氏はツムラが開催している講習会に参加する機会があつた。講師を務めていたのは大病院の副院長で、講演のテーマはまさか「方証相対」。質問を受け付ける段になり、日笠氏はこう訊いた。

「専門家の先生に来てもらつて、病気を区別していま

すが、『太陽病』とは、病

気がまだ体の表面にある状

態を指す言葉として理解し

て下さい。確かに風邪をひいたら背中がぞくぞくして汗が出ない状態」というの

はある。しかし、西洋医学

では風邪薬を肩こりには使

いませんし、さらに「傷寒

論」には乳汁分泌に効くと

は書いていません

ところが、「方証相対」の考え方には従えば、

「傷寒論」の葛根湯の欄

に書かれている症状が出て

いれば、風邪などの感染症

だけではなく、リウマチで

葛根湯を構成する生薬1つ

1つに薬理作用があるため、

様々な症状に効果を發揮するのですが、当時はそれが

は、薬を売らんがための方

法です。1976年以降、

148処方の漢方薬が保険適用になりましたが、その

頃、大学で漢方を教えるところはありませんでした。大学で教えるよりも先に漢方薬が保険適用されてしまつたのです。例えるなら、自動車教習所がどこにもないのに、突然、車が売り出された状態。これが、不幸と言えます

そう語るのは、香杏舍銀座クリニック院長で漢方医の日笠穰氏(66)だ。漢方の大家、山本巖医師に師事して三十数年前から研究を始め、現在は主に自費診療で漢方治療を施している日笠氏。以下、日笠氏自身の体験にも触れながら、ツムラが日本の漢方を歪めていた「構図」と「手法」を明らかにしていきたい。

「保険適用になつた当時、漢方の講義は一切行われておらず、今日でも積極的な講義が行われているとは言